環境にやさしい農業の取組が成果をあげています

地球温暖化の防止や生物多様性の保全に配慮した環境保全型農業が大きな効果をあげています。

地球温暖化の防止効果

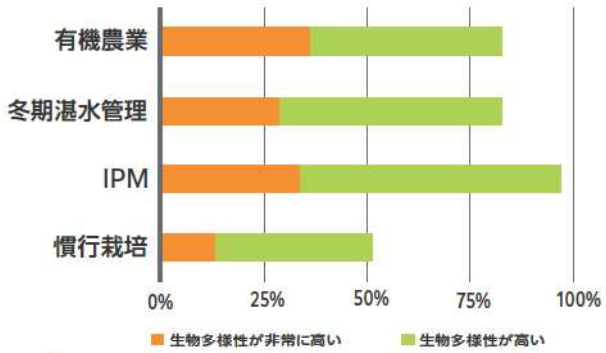
約15.5万トン/年のCO_2を削減

スギ林176㎢が1年間に吸収するCO2量に相当

※出典：林野庁「森林はどのぐらいの量の二酸化炭素を吸収しているの？」

生物多様性の保全効果

取組ほ場での調査結果



環境保全型農業とは、農業の持つ物質循環機能（水や栄養分等の循環）を生かし生産性との調和に留意しつつ、土づくり等を行い、化学肥料や農薬を減らすことで環境への負荷軽減に配慮した持続的な農業です。

農林水産省

環境保全型農業を応援してください！

温室効果ガス削減
生物多様性保全

※上記の商標は商標出願中です。

環境保全型農業でつくられた農作物の「見える化ラベル」

詳細はWebで！

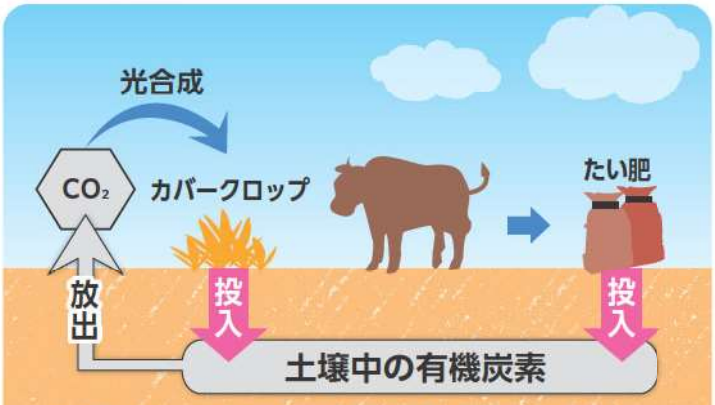
農林水産省では「みどりの食料システム戦略」を踏まえ、「地球温暖化の防止」や「生物多様性保全」の努力を分かりやすく等級ラベルで表示することで、消費者が地球環境に良い農産物を選択できる環境を整えていきます。

脱炭素社会に向けた取組

主な取組

「たい肥」を使ったり「カバークロップ」を栽培して土づくりを行うことや、「有機農業」を行うことは、一般的な農法に比べて農地の土壌に有機炭素がより多くたまり、地球温暖化防止に効果があります。

農地に炭素がたまるってどういうこと？

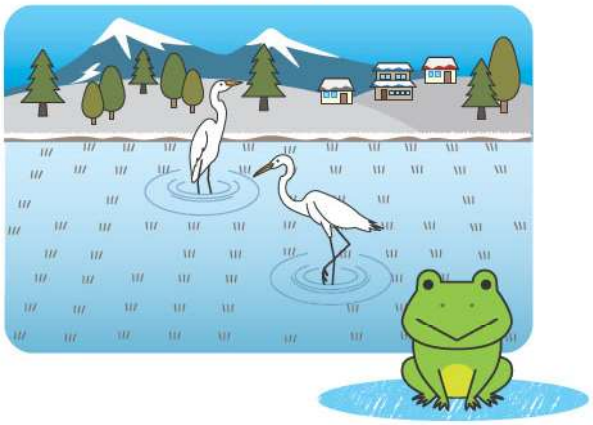


たい肥やカバークロップなどの有機物を農地土壌にすき込むことで、土壌中の炭素貯留量を増加させ、間接的に大気中のCO2削減に貢献します。

自然との共生を目指す取組

主な取組

化学肥料や農薬を使用しない「有機農業」や、冬期に水田に水を張る「冬期湛水」によってさまざまな生きものが育つ環境をつくります。



※**カバークロップ**：稲を収穫した後にレンゲなどそれ自体は収穫対象とはならない作物を栽培し、土壌にすき込むことで有機物を供給する取組。緑肥ともいわれる。
※**たい肥**：牛ふん、わら、もみがら等の有機物を積みあげ、微生物の力で発酵させたもの。土壌にすき込むことで有機物を供給することができる。

「環境保全型農業直接支払交付金」について

平成23年度から化学肥料・化学合成農薬を原則5割以上低減する取組と合わせて行う地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い営農活動を支援しています。
http://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/kakyou_chokubarai/mainp.html